

研究ノート

女性の多い職場で働くことについて —男子看護学生の抱える不安と教育支援の課題—

谷藤大貴、内藤雪枝、小川智子、塚本恭正

要 旨

背景：男性看護師の数は以前と比べ増加してきているが、病棟では依然として女性看護師の方が圧倒的に多い。男性が中心の職場で女性が働くことに悩んでいることは、テレビや新聞などで広く認知されているが、逆に女性中心の職場で男性が働くことについてはあまり知られていない。本研究では、看護師養成学校で多数を占める女子学生が男性看護師や男子看護学生に対してどのような印象を持ち、また一方でどのようなことに抵抗感を感じているのか調査した。

目的：女性が多数を占める医療現場や看護師養成学校で男性がどのようにその環境に適合し、活躍できるのか考え、持つべき心構えを考察することを目的とする。

方法：調査研究。A看護短期大学の看護科3年生（女子学生63名、男子学生4名）を対象としたアンケート調査。男性看護師への聞き取り調査。

結果：男子学生は看護学校入学時に少数派であり、心細く感じたり、男子だというだけで注目されやすいという状況に不安を感じている。女子看護学生は男性看護師を優しく頼りがいのある存在としてみている者が多かった。また男性が女性より力があるというイメージから男性看護師に力仕事を期待するといった回答も多かった。一方で男性看護師を「愛想がない」、「遠慮がちである」、「話にくい」、「抵抗感がある」、「怖い」といったマイナスのイメージでみるものもいた。男性看護師ということで清拭や陰部洗浄などの露出が多い看護ケアを行う際に抵抗感を抱かれる場合があることも明らかになった。

考察：看護職を目指すという大きな目標の前では、性別の差はさほど大きくはないと考えている。大事なのは患者との信頼関係を築くことであり、それには男性と女性で区別すべきことがあると認識しておく必要がある。男性的な考え方や父性といった女性の考え方や感性と異なる文化を導入することは、看護の質や組織を変えるうえで大きな原動力になると考える。男性と女性の看護師がいることで多様な看護を提供できると考えている。男性は筋力があるから力仕事や攻撃的な患者への対応をしたり、機械やPCなどの知識や技術を活かすというのは表面的なものであり、男性が看護を行うことには、独特の人間力を発揮できるということを強調すべきではないかと考える。

結論：男性看護師であるか女性看護師であるかは、実際の業務を行う上では大きな違いはない。男性看護師と女性看護師はそれぞれその特性を看護に活かし、多様な看護を提供することが重要である。

キーワード：男性看護師、性別、適性、人間力

所属：Taiki Tanifuji, Yukie Naito, Tomoko Ogawa, Yasumasa Tsukamoto

岩手看護短期大学 看護科

序 論

男性看護師の数は昔と比べると増加してきているが、依然として病棟では女性看護師の方が圧倒的に多く、看護学校に入学する学生も8～9割が女性であり、看護の現場は今後も女性が多い職場であることは変わりがない。男性が中心の職場で女性が働くことに悩んでいることは、テレビや新聞などで広く認知されているが、逆に女性中心の職場で男性が働くことについてはあまりマスコミなどを通じて情報が得られることは少ない。

将来看護師を目指すうえで不安に感じたことは、女性の多い職場で男性が働くということがどういうことかイメージしにくかったことである。上司や同僚の女性看護師が男性看護師をどのようにみているのか、患者は男性看護師を心理的に受け入れてくれるだろうか、など心配したこともあった。

本研究では、女子看護学生が男性看護師や男子看護学生に対してどのような期待を持ち、また一方でどのようなことに抵抗感を感じているのかその考えを調査するとともに、男子学生にも意見を求めた。また、実際に看護の現場で働いた経験をもつ男性看護師にも意見をいただいた。

方 法

対象者：A看護短期大学に通う3年生（男子学生4名、女子学生67名）を対象とした。

調査内容：質問紙調査を2013年4月に行い、調査は無記名で、個人が特定されないようにし、調査への参加も任意とした。また、本調査によって不利益を受けることはないことを説明した。

結果と考察

男子学生は看護学校入学時に男子ということでストレスを感じている

A看護短期大学3年生4名に対して看護学校に入学するにあたりストレスを感じたかどうか調査したところ3名の学生が「ある程度のストレスを感じた」と回答した。その理由は、看護

学校に入学する男子学生は依然として少なく（入学者70名中6名）、少数派であり、それだけで心細く感じられたり、男子だというだけで注目されやすいというものであった。

高校で進路を決める際に看護師を目指す男子生徒は他におらず、不安を共有する同級生がいなかったため心細く感じていた。特に看護短期大学に入学するということは、卒業後の進路は医療機関で看護師として働くことを前提としており、18歳の段階で将来をかなり明確に定めてしまうことについての不安もあった。特に男性は、家庭を築く場合に家計の大黒柱としての役割も期待されるため気軽に退職や転職しにくいのではないかと不安もあった。

入学して自分と志を同じくする男子学生がいることは、それだけで心強く感じた。実際に入学後は少数派ということで団結することができ居心地の良さを感じた。共に学ぶ男子学生の存在は大きく、入学前に感じていた少数派ゆえの不安はさほど感じられなくなった。

また、当初多数を占める女子学生とどのように関わっていったらよいか不安に感じていたが、行事や実習などで助け合ったり、苦労や悩みを共有するうちに性別の違いはさほど大きな問題ではなくなり、普通に仲良くコミュニケーションがとれるようになった。看護職を目指すという大きな目標の前では、性別の差はさほど大きくはないと今では考えている。

女子看護学生は男性看護師を優しく頼りがいのある存在としてみている

調査対象の約9割の女子学生は臨地実習などで男性看護師と接したことがあり、その際の男性看護師に対する印象を尋ねたところ、「優しい」とか「頼りがいがある」など肯定的な印象で回答した学生が多かった。また、行動力やリーダーとしての役割を期待しているといった回答もみられた。これは、女性の社会では特有の関係性（しがらみ）があると考えられ、その閉塞感を男性看護師が変えてくれるのではないかと期待の表れではないかと思った。

また、少数ではあったが、男性看護師に対してマイナスのイメージを持っている学生もい

た。これらの学生は、男性看護師を「愛想がない」、「遠慮がちである」、「話にくい」、「抵抗感がある」、「怖い」といったイメージでみており、それが実体験からくるものなのか、男性への固定概念からくるものなのかは今回の調査では明らかにすることはできなかったが、男性看護師の位置づけを考えるうえで重要な回答だと考える。もちろん女性看護師に対して上記のようなイメージを抱くこともあると思うが、男性は女性よりも力が強く、暴力的な気質を人によっては有している場合を考えると、警戒心を抱かれやすい存在だと考えた。このような印象を看護学生だけではなく、一般の女性患者も抱いている可能性もあり、男性看護師は、親しみやすい印象を与え、警戒心を解かせるといった努力を女性看護師よりする必要があるのではないかと思う。

そして男性が女性より力があるというイメージは、男性看護師に力仕事を期待するといった回答が多いことにも反映されている。今回調査した女子学生は、臨地実習などで男性看護師と関わる時間は限られていたと思うが、普段共に学んでいるクラスメートの男子学生から受ける印象が、「優しい」とか「頼りがいがある」など肯定的な印象の基になっているのではないかと考えた。

男子看護学生は自分たちに期待されることとして力仕事だと考えている

男子学生に対して、「臨床で男性看護師ということで期待される役割にはなにがあると考えていますか。」という問いをしたところ、4人全員が「力を必要とする仕事」と回答した。女性と比べて男性は筋力があり、自力で動くことのできない患者の移動や体位変換などで男性が活躍できるのではないかと考えていた。しかし、前項目で触れたように男性の持つ力が、患者などに警戒心を与えているかもしれないとは考えておらず、言動には注意しなくてはならないと思う。

男性看護師ということで抵抗感を抱かれる場合がある

女子学生に「あなたが患者だった場合、どん

な看護行為に抵抗を感じますか」と尋ねたところ、清拭や陰部洗浄などの露出が多い看護ケアを挙げた回答が多かった（清拭：33人、陰部洗浄：25人、寝衣交換：13人、排泄援助：12人、入浴介助：7人）。これらの回答は、一般の女性患者が抱くものと大きくは変わらないと考えられる。このような男性看護師に対して抵抗感を感じさせてしまう場合には、女性看護師に依頼するなどの配慮が求められると思う。大事なのは患者との信頼関係を築くことであり、それには男性と女性で区別すべきことがあると認識しておく必要がある。

この関係は、女性看護師が男性患者に対して清拭ケアなどを行う場合でもいえることであり、その際には男性看護師と交代するなど相互に協力し合うことが重要だと考える。

実際に医療現場で働いた経験をもつ男性看護師の体験談

実際に看護の現場で働いた経験を持つ男性看護師にインタビューをした。男性看護師として働くことのメリットとして以下の項目を挙げていた。

- ・医師や検査技師、薬剤師、理学療法士など他の職種と連携を取る際には、男性同士のネットワークを活かして女性看護師が連携する場合よりうまくいくことがある。
- ・男性看護師がいると病棟の雰囲気や和らぐことがある。

想像していた力仕事を任されるというコメントはなく、それよりコミュニケーション能力を挙げていたのが印象的であった。一般に女性の方がコミュニケーション能力が高いといわれているが、男性のコミュニケーション能力は女性のものとは質的に異なり、違うチャネルで他の職種と交流できたり、女性にはない発想で場の雰囲気を変えることが評価されているのかもしれない。但し、この能力は人によって異なり、男性だからということで皆が保持している能力ではなく、人によってこの能力には差異があると考えられる。

また、男性看護師であるということで感じたデメリットは、周りが女性看護師ばかりだとそ

の中に入っていく時に不安を感じ、男性看護師が他にいないと話をする相手がなく、精神的につらい思いをした、ということであった。入職する前や入って直後は不安感が高まり、慣れるまでが大変だったという体験談は、ちょうど看護学校に入学するときの男子学生の抱える不安と似ていると思った。両方とも女性看護師や女子学生と接していくうちにデメリットとは感じられなくなっている点でも共通していると思う。

また、70～80代の古い固定観念をもった高齢の女性患者を看護した際には、男性に看護されることに違和感を感じ、看護を断られたことがあり、さらに代替りの看護師に処置を頼むときに躊躇したことがあったということだった。患者に信頼されていないことを他の看護師に知られてしまうことや何度も他の看護師に面倒をかけてしまうことの申し訳なさでやりきれない思いを抱いたことが想像できた。頑迷な患者に対して無理に看護行為をすることはできないが、毎日接していくことで徐々に信頼を得るように努力していくことが必要だと考える。

結 論

男性看護師であるか女性看護師であるかは、実際の業務を行う上では大きな違いはないと考える。しかし、男性であるということの特性を生かした看護業務ができるのではないかと考えている。医療機関において看護は長い間女性が中心になって行われてきており、女性の視点で看護を行ったり、看護組織を運営してきた歴史がある。ここに男性的な考え方や父性といった女性の考え方や感性と異なる文化を導入することは、看護の質や組織を変えるうえで大きな原動力になると考える。

男性患者に対しても女性看護師とは異なるアプローチでコミュニケーションをとることもできると思う。女性間のコミュニケーションは言葉が中心だといわれているが、男性間のコミュニケーションは、言葉がなくても成立することがよくある。男性と女性の看護師がいることで多様な看護を提供できると考えている。

また、男性的な考え方で看護の組織のリダーシップをとることもできると思う。一般的に女性は周りを気にして自分の考えを言うことを躊躇することがあるが、男性は状況やしがらみにとらわれずに発言できることもある。また、上司が男性だと安心できるという看護師もいると思う。これは決して女性差別というのではなく、性差による特性を活かすべきだという考え方である。女性には女性のネットワークがあるように、男性にも医師や薬剤師、検査技師、理学療法士などの男性のネットワークを看護に活かすこともできる。

こうしたことを総合すると、男性看護師と女性看護師はそれぞれその特性を看護に活かすことができ、それをうまく活かせるようにすることが重要なのではないかと考える。男性は筋力があるから力仕事や攻撃的な患者への対応をしたり、機械やPCなどの知識や技術を活かすというのは表面的なものであり、男性が看護を行うことには、独特の人間力を発揮できるということを強調すべきではないかと考える。それが男性看護師の価値ではないかと思う。男性看護師は、このようなことを意識して看護業務にあたる必要があると考える。

謝 辞

本研究に協力してくださりました学生、及び看護師の皆様へ深く御礼申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 山崎裕二, 男性看護職の歴史的変遷と現在—今日的課題と期待される点—, 看護教育, 52, 264-268, 2011
- 2) 朝倉京子, 男性看護者の“サバイバル”論—ジェンダーの視点から考察する—, 看護教育, 52, 285-289, 2011
- 3) 田村聡司, 飯野矢住代, 加悦美恵, 男子看護学生の看護大学における適応の過程, 看護教育, 51, 586-587, 2010